

内部知覺について

西田 幾多郎

マイノングの「我々の知識の經驗的基礎について」と題する論文は内省的心理學以上に出て居ないが、内部知覺に對する精細にして明晰なる分析たるを失はない。私は之によつてかゝる内部知覺が何に基くかを考へて見たいと思ふ。

マイノングに従へば、眞の經驗即ち直接經驗と知覺とは同一である。知覺とは單に表象ではなくして、判斷である。知覺の對象は性質ではなく、物であり、すべての知覺は存在判斷である。且、知覺の知覺たる所以は、その直接に明白であるといふことにあるのである。唯知覺の明白には所謂必然性は伴はない。併し如何なる場合に於て我々は實在を知覺するといひ得るであらうか。外部知覺に於ては、かゝる意味に於て眞の知覺を有つとは云ひ難い。唯内部知覺に於て、我々は此種の知覺を有つ

と考へることができ、即ち内部知覺に於ては、知る者と知られる物とが合一するのである。無論内部知覺といへども知覺する者と知覺せられる物との嚴密なる合一は望まれない。兩者の關係は通常、直接の繼續といふに過ぎない。内部知覺の明白は記憶のその如く單に *Vernunftsevidenz* に過ぎない、唯現在の極限 *Gegenwärtigkeitsgrenze* に於て、確實の極限 *Gewissheitsevidenz* に達するまである。現在の極限を遠ざかるに従つて内向的體驗の性質を失うて、外向的なる想像に近づく、従つて内向的體驗の表象は現れなくなるのである。内部知覺に於て右の如くにして知覺の目的を達するを得るとすれば、外部知覺に於ても、全然それが知覺の性質を缺くとは云はれない。感官によつて我々に外界の實在が教へられるのである。無論、確實なる明白に達することはできないが記憶の場合に於ての如く、*Vernunftsevidenz* を有つことはできる。内部知覺と外部知覺との相違は前者に於ては *Vernunftswissen* が確實の極限に達することが可能であるが、後者に於てはそれが不可能である。内部知覺に於ては、實在をその性質によつても知り得るに反し、外部知覺に於ては物の存在を知り得るも、その性質については、唯現象的として半知覺を有するまでである、本體的性質を知ることにはできない。單に *ideale Superiora* によつて迂迴して之を知り得るのみで

ある。

マイノングは知覺は單に表象ではなく、判斷である、積極的の對象的 Objectivity を有つた存在判斷であると云つて居る。斯く考へることによつて、知覺が物理的世界の基礎となり得るのであるが、一つの根本的な客觀界を與へる知覺作用は、單に表象と判斷との結合であつてはならぬ。此兩者を含む根本的作用がなければならぬ。私にかゝる作用の意識を、我々の行爲の意識、意志の自覺に求めたいと思ふ。表象と判斷との統一、理想と現實との結合、そこに我々の能働的意志の意識があるのである。マイノングは明白といふことを知覺に缺くべからざる性質と考へて居るが、私は明白といふのは行爲の自覺に伴ふ感情であると考へる。 cogito ergo sum が自明の眞理であるといふのは、知即行、行即知なる自覺の意識なるが故である。藝術の世界に於て、我々は一種の明白の感を有するのも、作る事が見ることなるが故と考へることができさる。數學的眞理の如きものが必然的明白と考へられるのは、その對象界が自己によつて創造せられると共に、その作用自身が作用の作用の立場に於て限定せられて居る故である。斯く云ふならば、すべての對象界は超越的自己によつて構成せられたものとして、知識が皆明白でなければならぬまいと云ふでもあらう。私はすべて客

觀的知識の基礎には、それぞれの意味に於て明白なる直觀に基がねばならぬと思ふ。但、すべてが所謂先驗的知識の場合の様に必然的であるとは云はれない。

マイノングは知る者と知られる物と一なるが故に、内部知覺に於て我々は知覺の理想に近づき得ると云ふが、如何にして斯く云ひ得るのであるか。氏の云ふ所によれば、或一つの對象の存在を認識するには、その内容によつて對象に關係する一つの表象を要する。その外、この表象并に内容と結合することによつて、同じく對象に關し之を理解する判斷を要する。内部知覺に於て知る者と知られる物と一となるといふのは、對象が對象たる性質を失はないで、内容の位置に來ることであるといふ。併し我々の問題はかゝる内省的事實の説明に始らねばならぬ。對象の性質を失ふことなくして、對象が内容の位置に來るといふことは、内容が即對象となるといふことではなければならぬ。内容が即對象となるといふには、内容が内在的であると共に超越的なる意味を有たねばならぬ、即ち内容と對象とが性質的に一つでなければならぬ。併し性質の異同は何によつて決することができるか。性質の異同は普通に經驗によると考へられて居るのであるが、私はマイノングが此論文の始に於て論じて居る如く、一種の先驗的知識によると考へ得ると思ふ。マイノングが云つて居る如

く、赤と緑とは違ふとか、灰色は白と黒との中間に、オレンジは黄と赤との中間にあるとかいふ判断と、石が地に落ちるといふ判断とは、その性質を異にして居る。後者は全然經驗による知識であるが、前者は經驗的知識の *paradigma* として後者とその性質を異にして居る。後者は表象に於ても、判断に於ても經驗によるのであるが、前者は表象に於ては經驗によるが、判断に於ては經驗によるのではない、此意味に於て先驗的といふことができる。右の如く考へるならば、対象の地位に立つ内容、即ちマイノングの所謂「内」に向けられた内容といふのは、それが先驗的判断の対象であると共に、經驗的判断の対象であるものでなければならぬ。無論同じく非經驗的判断と云つても、色の判断といふ如き性質的判断と數學的判断といふ如きものとは直に同一視することはできぬ。マイノングも云つて居る如く、色の判断といふ如きものは、表象に基いて居る、表象作用といふものが、その基礎を成して居る。之に反し、數學的判断の基となるものは、表象ではなくして理性である。數學的对象が内に向けられた内容として、内部知覺の対象となるには、表象的对象の形を取らなければならぬ。

我々の認識作用に對して超越的对象と考へられるものは如何なるものであるか。認識作用を時間 に於て生滅する單なる出來事として見るならば、如何にしてかゝる

作用が超越的對象を自己の中に映し得るかを解することはできぬ。兩者の間には、何等かの意味に於て不可分離の關係がなければならぬ。マールブルク學派の如く考へるならば與へられたものは解くべく與へられたものであり、對象は思惟に外的なるものではなく、思惟によつて要求せられたものである。對象、内容、作用との區別をかゝる立場から見るとならば、内容の中に對象を含み、對象とは内容が自己を完成し行く行先であり、作用とは完成し行く過程と考へることもできるであらう。而して右の如き對象と内容との關係を極めて形式的に考へるならば、内容が單に對象を表はすといふ指示的關係をも此中に收めて考へ得るでもあらう。マイノングは、高次的對象とそれ等の關係について「に於て對象と作用との區別を論じて次の如く云つて居る。我々は現に存在せぬものを表象し又は判斷することができぬ。表象は存在して居るが、内容は存在するのではないと云はれるが、内容は對象と異なつた意味に於て存在する。存在の意味に於て異なるのみならず、兩者はその性質に於ても異なつて居る。内容は表象作用と一緒に實在的である、内容なくして表象作用はない。精神的なるものも、物質的なるものも、表象的對象となるが、内容は表象作用の内容として、いつも精神的である。我々は青いとか、暖いとかいふものを表象すること

はできるが、表象作用や内容が青いとか暖いとかいふことはできない。内容の對象と異なる所は、對象の異なるに關らず、内容はすべて表象するといふことを共有して居る。併し又異なるれる對象の表象は何等かの意味に於て異なる所がなければならぬ。此の如き差異は内容にあるのである。

我々は青いとか暖いとかいふものを表象するが、我々の表象作用や内容が青いとか暖いとかいふのではない、太陽は輝くが太陽の表象は輝くのではない。斯く考へれば對象と内容との區別すべきことは明である。併し全然對象の性質から離れた内容とは如何なるものであらうか。表象性といふことが、表象の内容に共通であるとしても、種々なる内容の差別は何によつて起るか。單に種々なる對象の性質的區別に表象性が加はつたものとするならば、内容とは單に考へられたもので内部知覺の對象となることすらできないであらう。對象が内容となることによつて如何に變せられるか。單にそれが表象作用となるといふだけなら、内容と作用との區別はつかない。若し内容を何等かの意味に於て對象を表はす符牒の如きものと考へて見るか。池に映れる月影と月とのごとき關係に於て内容は對象の模寫ではない。何となれば、月の如く影も光るといふことができるのである。太陽は輝くが太陽の

表象内容は輝かないと云ふ如く兩者相異なり、而も一が他を表はすと云ふには、物と言語との如きものを考へることができらるであらう。表現作用とは如何なるものであるか。犬といふ動物と犬といふ音聲とは似よりもせないものである。然るに、如何にして後者が前を表はすことができるか。言語によつて或物が言ひ表はされるには、その間に意味といふものが入つて來なければならぬ。言語は意味を表現し意味は物を指示するのである。フィードレルの如く言語は思想發展の最後の階段とするならば、言語と物との間に意味が入つて來なければならぬ。それでは意味と物とは如何なる關係に於て立つか。一方から考へれば、ブレンターノ學派の云ふ如く意識現象は意味を含んで居なければならぬ、之によつて對象を指示するのである、物に關係するのである。併し一方から考へれば、意味を離れた物といふべきものであるか、意味を含まない物といふものがあるか。例へば青いもの、暖いもの、青い暖いといふ意味とは離すことはできない。前者の中に後者が含まれて居ると考へることができらる。無論含まれるといつても、我々は青いものを見、暖いものに觸れることはできらるが、意味を見、意味に觸れることはできぬ。意味は内容や作用と同じく、青いとか暖いとかいふことはできない。意味は唯思惟の内容として考へることができらる。

きるが、知覺することはできないのである。

二

青いとか暖いとかいふ語は物の性質を言ひ表はす語である。物に就いての判断の述語となるが主語となることはできぬ。併し包攝判断の場合に於ては、青は色であるといふ様に、判断の主語となることが出来る。判断の主語とは如何なるものであるか。判断とは繫辭によつて主語と述語とを結合するのではなく、直覺的に與へられた総合的全體を或形式によつて分析することによつて成立するのである。ゾントなども「馬が走る」といふ判断は先づ「走る馬」の総合的表象が與へられ、思维の形式によつて之を分析することによつて成立すると考へて居る。かゝる場合、此判断に客觀的基礎を與へるものは何であるか、即ち此判断をして判断たらしめるものは何であるか。ボサンケ―は知覺的判断に於て眞の主語となるものは、所謂論理的な主語ではなくして、實在であると云つて居る。「此机は檜から造られて居る」といふ判断は、我々は檜の本目や色を知り居り、檜から作られて居る」といふ意味を實在の此一點に於て見出すのである、即ち判断の内容が、述語として實在について云はれるのである。

判断は主語たる實在と述語たる思想との一致を示すものである。心理學者が與へられた綜合的表象を分析して判断が成立するといふ時、此判断に客觀性を與へるものは此統一であつて、此統一は即ちボサンケーの所謂實在でなければならぬ。それでは、青は色であるとか、青は赤と異なつて居るとかいふ如き判断に於て、之に客觀性を與へるものは何であるか。此色は青いとか赤いとかいふならば、前の記述的判断と同様に考へ得るであらう。併し青が赤と異なるといふには、その基礎に色自身の體系がなければならぬ、青は色であつて音でないといふには、感覺的性質の體系がなければならぬ。此の如き體系は前の判断の場合に於ての様に實在の體系ではない。併しそれ自身の上に立つ、動かすことのできない眞理の體系でなければならぬ。「此馬が走る」とか、「此机は檜から造られて居る」とか云つた場合は、「物と働き」とか「物と性質」とかいふ思惟の形式によつて、與へられた直接經驗を分析して、判断が構成せられるのであるが、色の判断の如き場合に於ては、色自體の體系といふ如きものを、同一とか、相違とかいふ思惟の形式によつて、分析したものである。兩者の相違は、その基礎となる體系の相違によるといふことができる。

物を知るといふことは如何なることを意味するか。普通には、我と物と對立し、何

等かの形に於て我の内に物を寫すことによつて、物を知ると考へられる。眞理とは知識内容と對象の一致と考へられて居る。内部知覺が最も確實なる知識と考へられるのも之に由るのである。外部知覺に於ては、我は物と直接することはできないが、内部知覺に於ては、我は我の中に現れ來たるものを知るのである、知る者と知られる物とが一致するのである。併し内部知覺に於ても、果して知る者と知られる物とが一致すると考へ得るであらうか。我々の内に現れ來たるものは「時」の形式に於て現れ來たるのである。我が我の中に現れ來たるものを知らうとする時現れたものは既に過去に屬するのである。我は何時でも現在を捉へることはできない。現在とは我に對して理想的なる一點にすぎない、一つの極限點に過ぎない。マイノングも云つて居る如く、唯現在線上の直接繼續に於て結合するのみである。内部知覺といへとも、單に *Vermutungsevidenz* を有つて居るときで、あつて唯現在の極限に於て確實の極限に達すると考へ得るのである。併し是に於て我々は一つの問題に撞着せねばならぬ。事實の知識は現在の意識によつて確知せられるのである、現實の私が知るといふ事實の上に事實の知識の客觀性が立せられるのである。若し現在が爾く達することのできない極限であるならば如何にして之によつて過去の事實の知識

が立せられるのであるか。記憶によると云へばそれまであるが、想起せられるものは過去に屬するが、記憶表象は現在意識に屬するのである。同一には達する事はできないが、直接の繼續によると考へ得るかも知らぬが、何等かの意味に於て同一の意識がなければ、直接の繼續の意識といふものも成立し得ないのである。我々は對象の意識と作用の意識とを區別することによつて、右の如き矛盾を避ける事ができると考へることが出来る。現在の我は對象として知ることができないが、働く我として我は直に我を知ることが出来るのである。現在といふのは時の連續に於ける一つの極限點である。極限點の認識は立場の超越によらねばならぬ、作用が作用自身を知ることによつて可能となるのである。プラトールが我々は同一なるものを知ることができないが、同一ならざるものを知る時、既に理念として同一を知つて居らねばならぬと云つた如く、現在を達することのできない極限といふ時、既に現在を知つて居なければならぬ。之によつて現在と現在ならざるものとを區別するのである。達することのできない現在點といふことゝ過現末に於ける時の連續といふことゝは離すことはできない。達すべからざる現在と、直接の繼續によつて知り得た過去といふものとの間には、所謂直接に與へられた反省することのできない直接經

驗と、判斷によつて言ひ表はされた認識との關係に等しきものがあるのであらう。カント學派の人々は體驗は認識以前なる故に知ることができないと云ふ。併し我々は「此花が赤い」といふ時之に客觀性を與へるものは何であるか。不可知的なる體驗が如何にして知識に確實性を與へ得るか。赤い花を青いと云ふ時、我々は此判斷が誤ると考へざるを得ない。而も斯く考へざるを得ざらしむるものは、判斷の形式ではなくして直接經驗の内容に外ならないのである。

私は是に於て認識主觀と心理的主觀の區別及び關係について考へて見なければならぬ。心理的自己といふのは一次元的なる「時」の形式の中に生滅する現象の統一を指すに過ぎない、物と同じく「時」の範疇によつて考へられた認識對象といふの外はない。かゝる自己が知るといふのは如何なることを意味するか。心理的に考へれば、自己とは時に於て移り行く現象の流に伴ふ比較的不變なる一種の意識内容であつて、ジュームスの所謂烙印の如きものと見るの外はない。併し伴ふといふ語はその意味を嚴密にせねばならぬ。すべての物體は重いといふ様に共通の性質を有つと考へることもでき、又同様の意識内容が加はつて居るといふ意味に解することもできる。心理學者の考は後者の意味であると思ふ。ジュームスは之を我々の反省

に伴ふ筋感の如きものと考へ、ヅントも思惟や意志の如き統覺作用に伴ふ一種の感情と考へて居る。斯く考へれば、自己の意識といふのは、他の意識と並んだ意識内容であつて、我が他を知るのではない、二つの意識現象が時間上に相伴ふまでいある、自己意識の伴はない意識もあると考へることが出来る。無論此の如き場合には、推理によつて間接に自己の意識に屬したことを知り得るであらうが、直接に自己意識の連續を認めることはできぬ。かういふ場合に於て自己といふのは、恰も我々が現象の背後に物を考へる如く、考へられた自己でなければならぬ。その間に働くものど働きといふ如く關係を考へ得るであらうが、知るといふことは成り立ち得ない。時間上に於ける連續的統一によつて一つの生命を考ふると、擇ふ所はない。右の如き考へ方に反して、直接に現れることが直に知ることであるとすれば、我が知るなごといふことはない。ジュームスの如く意識は存在するかと問はねばならぬであらう、遂に意識の統一といふものもできなくなる。併し翻つて考へて見れば、我々が斯く論ずる時、我が考へて居るのでなければならぬ、時間上に連續する我を考へるものは我自身でなければならぬ。直接には連絡を斷たれ、忘れられた過去の意識をも、推理によつて一つの我に結合するものも我自身でなければならぬ。かゝる自己は

對象化することはできぬ、知る我であつて知られる我ではない。カントが *Das „Ich denke“* muss alle meine Vorstellungen begleiten können といつた我とは、此の如き我でなければならぬ。知るといふことも一つの働きには相違ないが、知るものは知られるものの中に働くのではなく、之を超越したものでなければならぬ。然らば全然知識對象界を超越して之を構成する純粹我といふ如きものが、眞の我といふべきであらうか。全然個人我を超越して何人の我でもない我は、眞の我といふことはできぬ。此の如き主觀は主觀ではなく、價値體系の統一ともいふべきものであらう。超越我といふものもなく、經驗我といふものもない、眞に知る我といふものは知識對象界を超越すると共に、又その中に於て働くものでなければならぬ。「物が働く」といふことが一つの思惟の範疇であるとするならば、自己が自己を自己の範疇に當はめることが知るといふことである。此には多くの矛盾を含んで居ると考へられるでもあらう。併しかゝる矛盾なくして我々の自己の意識は成立し得ない。自覺に於ては、何處までも現實的なるものと、何處までも超越的なるものとが一つである。一般的なるものと特殊的なるものとが一つである。自己とはこの結合點を指すのである。

物を知るには、「時」の範疇によらねばならぬ、「時」は實在の範疇である、經驗的自己を知

るにも、時の範疇によらねばならぬ。併し眞の自己は時の中にあるのではない、時は自己が自己を知る自己の形式である。達することのできない極限と考へられるものは、對象化することのできない自己の深い奥底に外ならない。背理の様ではあるが、自己は現在に於て自己自身と合一すると共に、自己を超越して居るのである。果なき過去と未來とは、此の現在の自己の投げたる陰影に過ぎない。我々は時を一次元的なる直線の如きものに考へ、現在を一點と考へる。斯く考へる時、此點は捉へ難きものではない。一直線上に一點を定めることはできる。併し此の一點が幾何學的點である時、それは延長を有することはできぬ。加之、それが連續の一點として、我々は他の點より無限に之に近づくことはできるが、達することのできない *Hilfungsstelle* でなければならぬ。普通は之を紙上に見る一點の如く考へる故に、*Jeümss* の如く現在は馬鞍の如く延長を有することも考へられるのである。併し若し現在がいくらかの延長を有すると考へるならば、その間は時は止つて居ると考へねばならぬ。時はいづれの點に於ても連續的であつて、いづれの點も或一定の方向に向つて動いて居るものでなければならぬ。斯くして現在は捉へ難き一點となるのである。併し時に於てすべてのものが動き行くと共に、時自身は留まると考へなければなら

ぬ。何物が留まると考へられるのであるか。時は一定の方向を有つて居る、時に於ては、すべての物が唯一の方向に向つて動いて行いて行く、此の方向は不變でなければならぬ、方向其者は移り行く點に對して永遠の現在である。併し一つの線に於ては、方向と一々の點とは離すべからざる關係を有つて居る、コーエンの云ふ如く曲線に於ける一々の點は生産點である、一々の點の背後には全體の意味が含まれて居る。加之、單に曲線の一點といふ如きものでは、未だ現在といふものはない。現在といふのは擇ばれた一點でなければならぬ、動き行く方の一點といふ如きものに於て、始めて現在といふべきものを考へることができぬ。併し、いづれの物が動くのであるか、我々は絶對に動くものを定めることはできぬ。眞に動くものを定めるものは、唯、全體の統一者でなければならぬ、我々は此の統一者の立場に立つとはできぬ。唯、自己の意識界に於てのみ、我々はかゝる統一者の立場に立つのである。我々は通常物が動くとき考へる時、自己の現在の立場に於て一つの世界を考へ、その範圍に於て動くものを見て居るのである。併し、單に統一者の立場に於て全體を見ると云ふだけでは、眞に動くものを知ることにはできぬ。眞に時に於て動くものは主觀自身の中に求めねばならぬ。何處までも對象化することのできない主觀が、我々に動くものゝ概念

を與へるのである。それで單に一定の方向を有つたものが、動くものではない、静止せる線でも方向を有つて居る。動くものは自ら方向を定めるものでなければならぬ、方向を作つて行くものでなければならぬ。現在といふのは、一定の方向を有つた線の一點でない、無限なる方向の中の擇ばれた方向の一點でなければならぬ、無限なる方向の統一點でなければならぬ。眞の時といふのは、對象化せられた一線ではなくして、對象化することのできない主觀の創造し行く跡形でなければならぬ、一々の點が絶對の意義を有つて居なければならぬ。眞の現在とは、かゝる創造の中心點である。現在に於て種々なる「時」の世界を創造せられ、我々は現在から種々の世界に入ることが出来る。留まる時自身は單なる形式ではなくして、創造作用でなければならぬ。

・創造的自己の立場から見れば、すべてが自己に對して現前して居る。此意味に於てアウグスチヌスの云つた如く、過現未の三つの時があるのでなく、唯現在あるのみである。過去の現在、現在の現在、未來の現在といふものがあると云ひ得るであらう。併し經驗的自己の立場から云へば、自己は時の中に流れ行くものである。かゝる自己には、自己の意識範圍を越へて、過去も未來も直接に知るとはできないばかりでな

く、現在といつても、それが嚴密に考へられは考へる程、近づき難きものとならねはならぬ。自己が現在を知ることができないといふのは、何を意味するか。自己を時間上有有限なる統一とすれば、その範圍外を知るとはできぬ。此意味に於ては、過去も未來も直接に知ることができぬ、唯現在を知り得るのみである。之に反し、現在が瞬時にも止まることなく流れ行く一點とすれば、捕捉すべからざるものは現在であつて、我々は之を中心としてその前後を知るといふことゝなる。斯く考へれば、そこに解き難い矛盾が含まれて居る様であるが、現在が捉へ難く達すべからざる極限と考へられる時、時の意味が變せられて居ると考へることができ、心理的時の意味から物理的時の意味に變つて行くのである、對象界が異なつて行くのである。斯く實在界を構成する「時」の内容が變せられながら、自己の内容が前の如く單に感覺的經驗の中心として考へられる時、現在は自己によつて達すべからざるものと考へざるを得ない、向の自己に對しては高次的對象界となるのである。自己が自己を省みることがはできぬといふのと同様である。我々は此場合、時は流れ行く無限の流動なるが故に捉へ難いと云ふが、かゝる連續は感覺的對象ではなくして、思惟の對象でなければならぬ。併し思惟の對象界といふのは、自己に對し外的なるものではない、思惟我によつ

て構成せられたものである。かゝる自己に對しては、心理的時はその意義を失ひ過去も未來も共に現在となる、否純なる思惟の對象に至つては、時といふものはない。我々が思惟の對象界を思惟するといふに何の矛盾もない、唯自己の立場を轉して思惟の世界に入るまでいある。矛盾は思惟すべきものを見ようとする所に潜んで居る、而も此の解き難き矛盾が即ち自己の存在である。時の範疇といふのは、此の矛盾を解く爲に起つて來る。感覺の世界からしては、思惟の世界は上り行くことのできない世界であり、思惟の世界よりしては、感覺の世界は下ることのできない世界である。而も此の兩界は互に無關係であることはできぬ、我によつて結合せられて居る。此の兩界の間に何等の關係もないといふことは、我の自覺がないと云ふことにならねばならぬ。苟も我の自覺が許される以上、此の兩界が我に於て結合して居なければならぬ。私が物に觸れ、物を見、物を考へる、此の如き作用をなす私は唯一つの私である。形や色や思想が物の鏡に映する如く我に何等の痕跡を残さないならば、我といふものもなく、時といふものもない。併し既に映すと考へられる時、映するものがないければならぬ、鏡がなければならぬ。鏡は鏡自身を維持し、すべての映像は鏡によつて統一せられるのである。如何にして我が我自身を維持し、物の映像が我に於て

互に關係するであらうか。赤の表象が青の表象に變すると意識せられるとすれば、その間に變する點がなければならぬ。此點は赤でもなければ青でもない、赤が終つて未だ終りきらない、青が始まつて未だ始まらない點でなければならぬ。さういふ點は考へられた點であつて、見られるものでないといふ得るでもあらう。併しその點は我々が現實に見て居る赤とか青とかの點に比して、非現實的とは云はれない。我々が赤から青を見て行く時、何處かにさういふ點を通らなければならぬ、否孰の點を通つた場合にも同様のことが云はれなければならぬ。若しかゝる點を非現實的となすならば、かゝる點を自己の中に求めねばならぬ。私が赤の點から青の點に移る時、何處か私の心の中の一點を通るのであらうか。私の心に於て赤の表象と青の表象とが記憶によつて結合せられると考へる。表象の内容として客觀的に結合することができないとすれば、作用として主觀的に互に結合すると考へねばならぬ。二つの作用は記憶の深い底に於て互に重り合つて居ると考へねばならぬ。併し連續の問題を内に移したとしても、それに因つて矛盾を解き得たといふことはできぬ。自己の或一點から他の一點への推移は如何にして可能なるのであるか。その間には二つの意識内容が消えて而も内面的に結合して居る零點を通らねばならぬ、此の

點は客觀的には非實在的と考へ得るとしても、主觀的には實在的でないならば、意識に於ける實在點でないければならぬ。更に此點をも非實在的とするならば、我々もはや何處にも統一的實在を見ることはできぬ。前の二つの點が意識的に實在的であるとすれば、此結合點はそれにもまして實在的でないければならぬ、その孰か一つから見れば無と考へられるかも知らぬが、高次的には兩方の内容を含んだものと考へざるを得ない。我々が赤の空間から青の空間に移り行く時、兩方の空間が實在的である以上、實在的なる空間を通らなければならぬ、空間は連続的でないければならぬ、何處か或一點又は一線に於て、赤が終り青が始まると考へられねばならぬ。視覺的空間にして色のない空間といふものはない。若しその中間にいくらかの空間があるとすれば、その空間は亦何等かの色を有つて居なければならぬ。そこに又前と同様の問題が起つて来る。是故に我々が色の推移を見る時、單に色を見るといふ意味に於て見ることでないのである。我々が物を見るといふ場合にも、此の如き意味がなければならぬ。物は種々なる性質の統一である。我々は此統一を見るのである。物の知覺が明白と考へられるのも之に由るのであらう。物の統一とは考へられたものと云はれるが、然らばその統一は主觀的となり、

主觀的統一は前に云つた如く又客觀的統一を許さねばならぬであらう。一つの畫には何處かに中心がなければならぬ、中心は意味の集まる所である。併し此意味の統一は考へられた統一ではなくして、見られたる統一である。切れ切れの感覺のみ實在的と考へ、統一を抽象的概念といふが、統一は己が心に於て見られるものでなければならぬ。而してかゝる統一が動かすべからざるものであればある程、客觀的である、思惟を離るれば離れる程、外に於て見られるのである。それで、我々が客觀的に見て居る一つの統一點といふのは、他の部分とは異なつた意味を有たねばならぬ、次位を異にして居るといふことができる、部分でありながら全體の意味を有つて居るのである。物がそれ自身によつて統一せられて居ること、即ち內面的統一を有つて居るといふことは、部分が全體の意味を有つて居るといふことである、而して眞の客觀的統一は此の如き統一によつて成るものでなければならぬ。すべての體驗は志向的であると云はれる如く、見るといふことであつても、何處かに中心がなければならぬ、その中心が視覺界の統一點となるのである。無論構成せられた物の統一點と、主觀的なる注意の焦點とは全く關係のないものと考へ得るであらう。我々は客觀的對象に關係なく、注意を種々の方面に向けることかできる。二つの色の界を注

視するも、一つの色を注視するも、注意作用と對象との關係に於て何等の異なる所もない。併しかゝる考は具體的なる意識現象を考へないで、注意作用を抽象的に考へるに由るのであらう。具體的意識に於て内容と作用とは離れたものではない。意識の統一點即ち注意の焦點であつて、別に注意作用といふものがあるのではない。意識は何等かの内容を有つたものである、内容自身が識別力を有つて居るのが意識である、内容を離れた意識といふのは、恰も物なき空間といふのと一般である。空間の一點が種々なる感覺的性質を有する時我々は之をリーマンの表面の如く、そこに種々の空間が重り合つて居ると考へることができ、一つの點を種々なる函數的關係に於て見ることができる。或一つの點が色を有し、溫度を有し、抵抗性を有する時、此結合が必然的である限り、そこに客觀的に統一するものがなければならぬ、即ち所謂物がなければならぬ。感覺的性質と空間とは抽象的には別々に考へることのできることもできるが、實在的には兩者を分つことはできない。意識現象に於ては、感覺的性質と時とが此の如き關係を有するのみならず、内容其者が働くと考へられねばならぬ。空間の一點に於て種々の感覺的性質が結合して居ると見るには、我々は此點を界として一つの感覺的性質から、他の感覺的性質に移り行くことができねば

ならぬ、此の一點が種々なる連續の結合點となるのである。此の如き意味に於て我々の見て居る現在は無限に深いものと考へることが出来る。我々は對象界の統一點と、之を見る主觀對象其者の統一と、自己の意識統一とは、異なつたものと考へて居るが、前にも云つた如く意識内に於て一つの意識から他の意識に移る間に、客觀的統一がなければならぬ、高次的統一がなければならぬ。外に客觀的統一と見るものも、具體的なる主觀的統一であり、主觀的統一の基にも、客觀的統一がある。此の如き統一の極致に於て、客觀的統一の中に主觀的統一が含まれた時、主客合一して一つの具體的統一となる。かゝる統一點が即ち現在である。物の世界も、心の世界も、此現在を中心として推移し、此現在に於て統一せられて居る。現在といふのはすべての經驗の最も具體的なる統一點である、全體験の綜合點である。我々は時の流に従つて現在を離れて行くのではない、唯現在の奥深く進み行くのである。

我々が赤の色から青の色に見て行く時、その推移の點に於て、兩者の統一を見る如く我々は現在に於て無限なる經驗内容の統一點を見、之によつて唯一の實在界を見ると考へるのである。現在が無限に動くものと考へられるのは、無限なる内容の統一點なるが故である。我々が眼を以て色の統一點を凝視し得る如く、我々は行爲我

によつて現在を凝視し得るのである。行爲的主觀は時に於て推移するものではない、行爲的主觀に於て時が成立するのである、行爲的主觀は永遠の現在である。現在とは行爲の我の凝視の中心として、體驗の最も明なる點でなければならぬ、すべての具體的知識の中心となるのである。此意味に於てジームスの様に延長を有する馬鞍の如きものと考へることもできる。現在は達することのできない極限と考へられるが、現在は直接に與へられた意識の中心として、最も明なるものでなければならぬ。デデキントが極限の存在を直線の直覺より出立した如く、極限概念の成立には與へられた直覺がなければならぬ。知識が現在の極限に近くに從つて明白となる、と考へられるのは、與へられた知識の理想が自己自身を完成し行くといふことに外ならない、志向的體驗が自己自身を充實し行くのである。理性的眞理に於ては永遠に達することのできない無限に遠いものと考へられるが、事實的眞理に於てはその理想は現在にあるのである、いつでも現在を中心として一つの實在界といふものが考へられるのである。我々が現在を中心として之を言ひ表はさうと思へば、現在は無限の内容を有つて居ると考へざるを得ない、何處までも之を言ひ盡すことはできない。併し之がために、現在が明白を缺くとは考へられない、フッサールの云ふ如く單

に不十全なる明白と考ふべきであらう。我々が此物は赤いといふ時、その赤の直覺は明白でなければならぬ、斯く云ひ表はされた時、始めて明となるのではない。唯思惟の範疇によつて構成せられた知識によつて、具體的なるものの知識に到達することができないのである。私は今現前して居る一つの物を見て行くとする。物は順を追うて我々に種々の象面に於て現れるが、我々は何處までも物の性質を盡すことはできぬ。私の知覺作用は一つの物を中心として、何處までも移つて行くが、中心其者に近づくことはできぬ。かゝる場合、我々の知覺作用は一つの瞬間から次の瞬間へ變つて行くが、物は何時でも現前して居ると考へることが出来る。現在といふには、何等かの意味に於てかゝる客觀的統一がなければならぬ、客觀的に動かないものがなければならぬ。一つの點を志向し、一つの點の周圍を作用が廻る、その中心が現在である。一步一步の意識作用は明である、此物は赤いとか、此物は重いとかいふ判断によつて言ひ表はされる。此作用は幾層にも分析して行くことができる。かゝる判断の主語となるものの直覺はいつでも明である。主語が單純であればある程、その判断は現在の内容を盡せるものの如く考へられ、現在は達すべからざる極限ではなく、我々は却つて現在より出立するといふ考に近づく。現在が現在自身の内容

を表現すると考へられるのである。主語なき文章といふ如き場合、我々は現在其者を直に言ひ表はすと考へるのである。その間に時といふものはない。主語となるものは未だ現在といふべきものでもなく、此といふべきものでもない、未だ客観化せられない内容である、判断の主語と認識主観とが一つである。我々が此物とか彼時とかを言ひ表はす時、その内容が無限となると共に達することのできない極限となる、併し思惟主観はいつでも現在である。時を経るに従つて記憶が不明となると考へられるが、我々が過去を想起する時、その対象界が變せられるのである、意識の次位が變せられるのである、此立場に於ては過去も過ぎ去つたのではない。唯、一層高次的なる統一の對象は之に對して達することの極限となるのである。統一の内容が單純であればある程、現在は達し得べきものと考へられ、その内容が無限に豊富なればなる程、現在は達し得べからざるものと考へられる。達すべからざる現在といふことは、過去と未來の達すべからざることを意味する、ロツチエの云ふ如く物はアリストートルの所謂 what was to be であると共に、what will be でなければならぬ。單一なる内容ならば、前の瞬間に於ても、後の瞬間に於ても變じ様はない、過、現、未の區別すべき様もない。我々の意識内容が抽象的に限定せられた時、現在は延長を有する馬

鞍の如きものにも考へられるのであらう。之に反し働く自己の立場に於ては、*quod* は無限の深さにして達し得べからざるものでなければならぬ。(未完)